

元浦河教会 ―開墾の地に讚美歌が流れて

大正七年八月、元浦河赤川橋南詰（現荻伏内海電気商会付近）で、教会関係者と大工たちが集まって“元浦河教会の引っ越し”をしていた。移動する荻伏市街に向かって、道路の上のべ板を敷き、その上にゴロといわれる丸太を並べ、さらにその上のべ板を敷いていた。教会の建物はロープで結わえ、その先を二頭の馬につないである。建物を土台ごとのべ板の上に乗せて、少しずつ移動させようというのだった。“ハイッ！”という馬かたの手綱さばきの声を合図に、移動は始まった。

引っ越しのことの起こりはこうだった。明治十五年に入植した赤心社の農場や、果樹園、教会、事務所、社宅は、当時、現在の荻伏駅付近に広がっていた。大正七年、赤心社事務所が村役場に寄付されることになり、原型のまま十日余りの日数を要して荻伏市街まで運ばれた。ところがそれを請負った業者の見積もりが外れ、予定以上の経費がかかってしまった。請負師は「その損害を補償してくれ、何か仕事をやらしてくれ」と村にかけあった。その頃の村議会の有力者向井裕蔵、藤原富蔵は、教会の役員でもあった。請負師の損を埋め合わせるために、「じゃあ教会も移すべ」となったのだった。

しかし教会の移動も思うようにはいかなかった。建物がゴロの上に乗ってしばらくいくと、あまりの重さに直径二五センチものカシワ丸太が簡単につぶれてしまった。クリの木なら固いといわれている。“クリなら会社（赤心社）の山に沢山ある！”と、みんなで山にクリの木を切りに行ってゴロにした。が、なま木であればクリもカシワもそう変わりはない。一日たつとつぶれてササラのようになくなってしまい、新しい木と替えなければならなかった。

こうして赤川のほとりから市街まで一・二キロの道を一週間かけて移動した。当時の道路は馬車一台分の道幅しかなかったから、真ん中にデンと教会があっては通れない。道行く人は脇の畑をグルリとまわって歩いて行かねばならなかった。それでも誰ひとり文句をいうものはなかった。こうして明治十九年創立し、明治二十七年に建てられた元浦河教会の建物は、現在地荻伏十五番地に落ち着いた。

教会の歴史をひもとくと、「元浦河基督（キリスト）教会を生み、之を育てあげたものは赤心社である」（「元浦河教会五十年史」）とあるように、教会が生まれる芽は神戸において設立された赤心社にあった。

鈴木 清や沢 茂吉をはじめ、開拓団のリーダーや神戸で赤心社を支えていた役員たちは、キリスト教徒だった。彼らは、英国からメイフラワー号に乗ってアメリカへ開拓移住したピューリタンたちに憧れを抱いていたというから、ピューリタン開拓と赤心社とをだぶらせていたのだろう。そこで、厳しい北地の開拓には、なによりも精神が第一と考え、明治十三年に作った赤心社の規則に、「毎日曜には一時間或いは二時間の演説討論等をなし、知識の進歩と俱に道徳を治めん」と定めていた。実際に未知の土地で慣れない開墾に従事し、食べるものも十分になく、加えて酷寒の冬をすごさねばならないのは辛いことだった。希望を抱いて渡ってくる者も多かったが、挫折して出ていく者も多かった。そんななかで文字通り開拓者のバックボーンとなって開拓をすすめる支えとなり、人を育てていったのが、キリスト教の精神だった。

赤心社では元浦河に入植するとすぐ草小屋を建て、日曜には安息日学校を開いてキリスト教の講話

を聞き、月曜から土曜までは寺子屋式の教育を始めた。しかしその草小屋は雨や風が吹き込み、防寒設備もなかったことから、十七年の春には信徒の集会と子弟教育のために、学校兼会堂を新築しようという動きが起こった。赤心社移民や、本社、内地有志から三四四円余の寄付金を集め、間口三間、奥行七間の木造平屋の学校兼会堂を建てた。完成は明治十七年暮れ、建物を神に捧げる献堂（けんどう）式は十八年の一月一日だった。学校は“赤心学校”と呼んで堀内 孫が初代校長を務めていたが、明治二十四年に公立浦河小学校荻伏分教場へと発展していった。

こうして会堂ができあがると、すでに兵庫県などの教会で洗礼を受けていたクリスチャンたちは、一日も早く教会を設立し、牧師を迎えたいと願った。沢 茂吉、和久山磐尾、湯沢誠明の三名を公会設立委員に選び、ことを進めた。牧師は「新地は千里を隔てし異郷なれば、善良き牧師を得るは難かるべし」（「元浦河教会五十年史」）として、赤心社で樹芸係兼徳育係を務めていた田中 助に牧師請願書を送って依頼した。田中は津田 仙の東京農学社に学んだときにキリスト教にふれて洗礼を受けた人で、十六年に赤心社に入社して来訪していた。

明治十九年六月二十六日。神戸公会からやって来たギュリック宣教師と原田 助牧師の立ち合いのもとに、浦河公会設立式と牧師挨拶礼（あんしゅれい）が行われた。田中新牧師夫人エイがギュリック氏寄贈のオルガンを弾き、皆で讃美歌五二をうたい、聖書の朗読、ギュリック氏の説教、公会の主意、信仰の朗読と式は続けられていった。讃美歌の流れる外は開拓地そのもので、まだあちこちに立ち木や切り株が残っており、木の柵で囲まれたなかに農耕のための牛や馬が草を食んでいた。社員住宅は草で屋根をふいた掘っ建て小屋であり、事務所さえきちんとしたものがないときだった。そんななかで真新しい教会が建てられ、来賓の新冠御料牧場長はじめ、百二、三十名もの参列者によって設立式が行われたことは、当時の人たちがどんなに“心”と“教育”とを大切にしていたかを語っている。こうして赤心社を精神面で支えていたキリスト教の拠点が出来上がり、この年の会員（信徒）は三十三名であった。

それから百余年。晩成社をはじめ北海道の開拓にあたった数多くの結社は次々に消滅し、現存しているのは赤心社だけである。良きリーダーに恵まれ、酪農による村づくりをすすめたり、小学校に付属農場を設けて勤労教育をしたのも、荻伏の地にキリスト教の精神が流れていたからこそである。また、各地のキリスト者が支援をしてくれたことも大きかった。荻伏バターの販売にあたっては、札幌の宇都宮仙太郎が力になってくれたし、ライオン歯磨きの小林卯三郎がいなければ、昭和九年からのハッカ作りもなかったろう。宇都宮は昭和五年、六年と元浦河教会で特別伝道の講演を行っている。そのような“キリスト教徒による理想郷づくりを”という熱い思いが、大正五年から昭和二年までの十年間を最長に、何度かあった教会に牧師のいない無牧師時代をも乗り越えて、百年の時を刻んできたのであろう。

さて、教会では設立当時から今日にいたるまで、日曜学校（明治の頃は安息日学校）を開いてきた。昭和の初め頃の様子、子どもたちが日曜日の午前中教会にあつまり、礼拝のあといくつかの組に分れて、先生から神さまの話を聞き、讃美歌をうたって帰るといった内容だった。牧師のほか、荻伏小学校の竹内鼎（たけのうちかなえ）、藤原武男、藤田 果らも日曜学校の先生を務めていた。東栄や浜荻伏も含め“そのへんの小学生のほとんどが教会に行っていた”と多くの人が語るように、昭和四年の八十一名を最高に毎年五十名前後の子どもが在籍していた。

子どもたちにとって一番の楽しみはクリスマス祝会だった。遠くの子は家族といっしょに馬ソリに乗って教会へやってきた。教会の中は美しく飾られ、ツリーにはたくさんのプレゼントが下げられて

いた。今のように一般の家庭にツリーのない時代だったから、その光景は誰の目にもまばゆく映った。讃美歌をうたい、聖書の朗読を聞いたあと、日曜学校の生徒によるキリスト降誕劇などが行われた。そしてみんなが“雪よふれふれ、雪つもれ〜”と歌っているなかに、サンタクロースに扮装した牧師さんが、杖をトントンつきながら入ってくる。子どもたちにとっては夢のなかのできごとのようなだった。サンタクロースはツリーからプレゼントをはずし、子どもたちに手渡していくのだった。お菓子のときもあったし、ノートや鉛筆だったこともある。昭和六年から十年までの記録をみると、クリスマスに集まったのは二百人から二百八十人もの人たちであった。

子どもたちにとって楽しみなことはまだあった。夏になると同志社の神学生が伝道のため一、二カ月来荻するのだった。学生さんは子どもたちとよく遊んでくれた。それにときどきは外国人も伝道にやってきた。ケリー牧師は子どももいっしょに家族ぐるみでやってきた。「小さい頃から外国の人に接することができ、外人さんを特別視することがなかったのは、教会のとても大きな力だった」と、安藤政喜は語っている。

さて、冒頭で土台ごと引っ越しをした教会は、明治二十七年、四百八十五円の寄付金で建てたものだった。昭和五年に礼拝堂の二階を増築したこの建物は、昭和五十八年までの八十九年間、信者たちの祈りがささげられていた。そして同年十月解体され、札幌の北海道開拓の村へと二度目の引っ越しをしていった。

[文責 小野寺]

【話者】

竹内 鼎	浦河町東栄	明治二十八年生まれ（平成三年三月没）
藤原 武男	札幌市西区	明治四十年生まれ
安藤 政喜	白老町荻野	大正四年生まれ

【参考】

元浦河教会五十年史	一九七九年	元浦河教会
元浦河教会創立百周年記念誌	一九八八年	元浦河教会
ピュリタン開拓 本多 貢著	昭和五十四年	赤心社
荻伏百年史	昭和五十八年	荻伏百年史編さん委員会